



(社)全高P連会報

社団法人全国高等学校PTA連合会（連絡先）〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町2-1（奥田ビル）TEL03-5835-5711 FAX03-5835-5757
 発行人 相川順子 URL <http://www.zenkoupren.org/> eメール info@zenkoupren.org

第六十一回全国高等学校PTA連合会大会
 北海道大会が、「いのち輝け！〜人・夢・愛 ひたむきに頑張る君たちを応援したい〜」をテーマに8月24日（水）から26日まで北の街札幌市において開催された。あの東日本を襲った大震災から五カ月余りが過ぎ、なおつらく



大会第一日は、開会に先立ち、東日本大震災で亡くなられた多くの方々に対し黙祷が捧

悲しい出来事が癒えぬ中、全国から一万人を超えるPTA会員及び関係者が参加し、互いの「絆」を確認しあう大会となった。

札幌白石高校吹奏楽部によるオープニングファンファーレの後、榊原綾子実行委員長から大会開会宣言があった。来賓の笠浩史文部科学大臣政務官の祝辞、相川順子大会会長の式辞、高橋はるみ北海道知事、上田文雄札幌市長の祝辞の後、PTAに功績があった方々の表彰式へと続いた。式典終了後、札幌出身で精神科医の香山リカ氏から「生きる力をつける処方箋」と題した講演があり、子育てについて示唆に富んだ話に参加者は興味深く耳を傾けていた。午後からは、7つ



げられ、の分科会に分かれ、熱心な研究討議がなされた。二日目は、高校生による発表の後、前旭山動物園園長の小菅正夫氏から「命をつなぐ!!」と題した記念講演があり、「今、生きていることは未来へ命をつなぐバトンタッチの場」と説く氏の思いに多くの参加者が魅了された。閉会式では、東日本大震災への義援金に対するお礼のあいさつがあり、盛会のうちに北海道大会が幕を閉じた。



全国大会 北海道

会長あいさつ・実行委員長あいさつ

文部科学省祝辞・大会宣言文

分科会報告

シリーズ青春白書 全国からの便り〜輝く姿がここにある〜

秋田県立男鹿海洋高等学校

「男鹿に学んで世界に羽ばたく」

1頁

2頁

3頁

4〜7頁

8頁

今号の主な内容

長野県立赤穂高等学校

『雄々しくたえぬ勤しみに』

確かな学力を身につけ、自立した人間をめざす

地区大会報告

シリーズ視点 東日本大震災ボランティア活動

会長事務局長会議報告・オーボエ贈呈

常置委員会報告

9頁

10頁

10・11頁

12頁

12頁

式辞

社団法人全国高等学校
PTA連合会 会長

相川 順子



すと共に、被災された皆様には心からお見舞いを申し上げ、これからの復興を願っております。

さわやかな北の大地札幌市において、第六十一回全国高等学校PTA連合会大会北海道大会の開催にあたり、公務ご多忙の中、文部科学大臣政務官、北海道知事をはじめ、たくさんのご来賓の皆様方にご臨席をいただき誠にありがとうございます。

「いのち輝け」をメインテーマのもと、全国各地よりおよそ一万名を超える会員の皆様と盛大に開催できます事に厚く御礼申し上げます。

さて、3月11日に発生した東日本大震災によって、それまで流れていた時間が止まり、長い年月をかけて築き上げてきた大切な物や、たくさん尊い命が一瞬にして奪われてしまいました。お亡くなりになられた方のご冥福をお祈り申し上げます。

私たちは、社会において自立できる子どもを育てていく役割を担っております。そのためには、私たち自らが学び、保護者力をつけて行くことが大切ではないかと考えております。

この度の東日本大震災によって、私は「いのち」という言葉に対する想いがとても強くなりました。親子の絆、家族の絆、地域の絆の大切さを改めて考えさせられました。私たちはこれまで多くの自然の恵みを受けてきましたが、この度はその自然がもたらした災害はあまりにも大きく、日本中を一瞬にして恐怖や不安におとしめてしまいました。しかし、そのような深い傷跡を目の前にして、復興を願い、人は動き出しています。そして、被災地の復興とこれからの日本を担う世代として、高校生たちもボランティア活動に励み、日常生活を取り戻しつつあります。「いのち」の大切さを実態としてとらえ、観念におちいることなく、生きていく力を学んでほしいと想っております。

PTA活動は申し上げるまでもなく、人との出会いにより、信頼を築き、次につなげていく役割を担っていると思っております。未来ある子どもたちのために、今後とも知恵を出し合い、共に同じ方向に進んでいきたいと考えております。

最後になりましたが、永年PTA活動にご尽力され、本日表彰を受けられる皆様の功績に敬意を表しますとともに、今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

歓迎のことば

第六十一回全国高等学校
PTA連合会大会
北海道大会実行委員長

榊原 綾子



全国高等学校PTA会員の皆様、ようこそお越しくださいました。北の大地の夏、さわやかな風が吹く北海道に多くの皆様をお迎えできましたことを大変嬉しく、感謝申し上げます。

今年3月11日に発生した東日本大震災では、多くのかけがえのない尊い命が奪われました。その悲しみは今だ癒えることはありません。

本大会のテーマは「いのち輝け！」です。一人一人が、いのちの尊さ、その重さ、そして家族のきずな、支え合うことの大切さという、深く重いテーマと向き合う大会となりました。

豊かな自然にあふれる北海道は、四季折々に、自然が生み出す命の鼓動

にあふれ、その輝きを感じることが出来る北の大地です。人と自然が響きあうこの場所で、人々とのふれあいを通して「いのち」の現在と未来を見つめたいと思います。

私たちは子どもという新しい命をこの世に送り出しました。そして、子どもたちへの思いは、いつの時代も変わらず「生涯にわたり心身ともに健全で心豊かな人間として未来を明るく生き抜いてほしい」という思いに凝縮されます。また、今日、我が国では、国際化、情報化、少子高齢化などの進展により、子どもたちを取り巻く状況は大きく変容し、こうした変化に対応する上で、PTAの役割はますます重要視されています。

本大会では、7つの分科会において、すべてメインテーマ「いのち」を根底におくテーマを設けました。子どもの「いのち」に寄せる根源的な願いをテーマに、未来を託する子どもたちをいかに

育み、「いのち」を輝かせるかについて研究討議を行いたいと思っております。また、基調講演は香山リカ氏による「生きる力をつける処方箋」、記念講演は小菅正夫氏による「命をつなぐ!!」です。「いのち」に寄せる思いを存分にお聴きいただければと思います。

この大会はおそらく、今後の日本の、国としての形が変わるであろう節目の大会となることでしょう。

被災地から、これからの子どもたちのためにとご参加いただきました皆様、本当にありがとうございます。皆様のお気持ちを、しっかりと北海道大会で受け止め、大会の成果を一人一人が分かち合い、全国の次代を担う青少年、高校生の逞しく健やかな成長を応援していくための力となるよう、全国の仲間と意義ある大会にする決意です。

結びに、本大会開催にあたりご支援いただきました文部科学省はじめ、北海道・札幌市ならびに関係団体の皆さま方から感謝を表しまして、歓迎のことばとさせていただきます。

祝
辞

浩史



また本日、岩手県・宮城県・福島県をはじめ、

記

社団法人 全国高等学校PTA連合会

まっております。しかしながら、私どもはしっかりとこの政策について検証をおこなったうえで、なんとかこの高等学校の無償化については引き続きこの政策を続けていくことができるように、また皆様方からのご意見も、PTA皆さんのご意見も承りながら全力をあげて取組んでまいりたいと思います。

結びになります。が、社団法人全国高等学校PTA連合会の更なる発展と皆様方のますますのご健勝を祈念いたしましてお祝いの言葉といたします。

本日は誠にありがとうございます。

学校教育とPTA

～いのちを育む教育～

於：北海きたえーる

第一分科会
夢や希望の実現に向け意欲を持って成長できるよう、愛情を込めた支援に取り組んでいくことにある。かけがえのない「いのち」を育み、思いやりのある、心身ともにたくましい子どもの成長に、私たちはどう関わっていくかという視点で、各校から事例発表があった。

今、学校教育に最も求められているのは、すべての子どもたちに「生きる力」を見つけていけることだと言われている。私たちの役割は、学校を通して、子どもたち一人一人が、自らの力で考え、目の前の困難を克服して新たな自分を作り出し、夢や希望の実現に向け意欲を持って成長できるよう、愛情を込めた支援に取り組んでいくことにある。かけがえのない「いのち」を育み、思いやりのある、心身ともにたくましい子どもの成長に、私たちはどう関わっていくかという視点で、各校から事例発表があった。



等学校PTA会長田部由美子氏からは、「子どもは生まれたときから親を見て育ちます。親が自分も他人も大切にできる人間なら自然と学んでいくでしょう。」という発表があった。

福井県立武生東高等学校PTA会長橋本勝利氏からは、姉妹校交流事業の事例を挙げ、「現代はまさに国際化の時代、子どもたちがこの時代を大きく羽ばたいていくためには、この機会を利用して保護者も同時に国際化の感覚を身につけていきたいものです。」とまとめた。

静岡県立科学技術高等学校育友会会長和田善彦氏は、科学技術高等学校が二つの高校が統合してできた学校であり、広くなった校区の中で、どのようなPTA活動を行って学校と地域社会をつないでいくかという点で「人間は決して一人では生きてはいけないこと、社会のさまざまな関係の中で生

進路指導とPTA

～キャリア教育と自己実現～

於：札幌コンベンションセンター

第二分科会
あった。森谷氏は進路支援は人生支援。親が子どもに進路支援をするということは、自分の生き方や社会との有り様を伝えることであり、それは「いのちのバトン」の営みとも言えるのではないかと語った。

第二分科会では、子どもたちの未来を一緒に切り拓くためにどう関わっていくか研究協議を行った。

北海道北見柏陽高等学校と見柏陽高等学校の会前会長森谷幸弘氏からは、会員が講師となつた「進路講話」と、進路資料「柏陽コンパス」への寄稿について報告があった。

森谷氏は進路支援は人生支援。親が子どもに進路支援をするということは、自分の生き方や社会との有り様を伝えることであり、それは「いのちのバトン」の営みとも言えるのではないかと語った。



の会会長高野剛氏からは、会員の男性、女性を問わず、さらに、一部の元会員も参加している「おやじの会」が呼びかけ、講師となった会員が、「おやじの仕事と社会へのつながり」と題して講演し、職業人の生の声を生徒に伝えた「キャリア講演会」についての報告があった。

兵庫県立兵庫高等学校前PTA会長田民俊英氏からは、生徒、教師、保護者が読書をとおして互いの理解を深めた「読書会」、同窓会の協力を得て、大学や研究所等を訪問した「東京みらいフロンティアツアー」、また、京都の大学を見学した「進路研修旅行」について説明があった。田民氏は、目の先の結果にのみとらわれず、どんな時でも子どもたちの良さをしっかりと感じて、見守り続けなくてはならないと語った。

香川県立善通寺第一高等学校PTA会長赤股誠司氏からは、大学等の見学を加えた「PTA研修旅行」、卒業生の「進路先マップ」を掲載し、難関大学等に進学した先輩の近況報告やメッセージも掲載した「PTA広報誌」、また、保護者を講師としている「なるには」講演会（職業講演会）について説明があり、保護者や子どもたちの進路意識を高めたり、保護者が進路について子どもと向き合ったりする契機になったとの報告があった。

活発な質疑の後、株式会社リクルートカンパニー「キャリアガイダンス」編集長角田浩子氏、北海道札幌手稲高等学校長中村均氏からの助言をいただき、盛会のうちに研究協議は終了した。

生徒指導とPTA

～人と人との関わりの中で～

於：ニトリ文化ホール

第三分科会

山形県立東根工業高等学校PTA会長 吉田康宏氏より「いのち」「まなび」「かかわり」を育むPTA活動と題して、16地区に分けて行われた地区懇談会と生徒によるボランティア活動。地域に根差す細やかな取り組みが報告されました。

神奈川県立磯子高等学校前PTA会長 仲谷利

人間的なつながりの欠如、人間関係の希薄化など、子どもたちを取り巻く環境が悪化している近年、「生徒指導とPTA」と人との関わりの中でというテーマのもと四校のPTA会長から実践されている様々な取り組みについて事例発表がなされました。

石川県立金沢西高等学校PTA会長 西村義浩氏より「絆、生徒とのふれあい」と題して、保護者が校門の前に立ち登校してくる子どもたちに挨拶や声かけをする活動や、大学進学のため一人暮らしをする子どもたちのための「簡単レシピ」の作成と試食会の活動が報告されました。

鳥取県立倉吉総合産業高等学校前PTA会長 中井浩氏より「生徒指導から生活向上へ、生徒会・学校・PTAで築く学校ブランド」と題して、子どもたちが地域に出て行く催しを



しを実践し、子どもたちが社会に向けてスタートを切れるよう、エールを送る意味でのぼりを立てての爽やかあいさつ運動が報告されました。

4校のキーワードは「あいさつ」。コミュニケーションの一步として、まず大人が手本を示し実践していかねければならないと強く感じました。

最後に、北海道教育庁オホーツク教育局 教育支援課高等学校教育指導班指導主事 相馬利幸氏と北海道野幌高等学校校長 山本伸弘氏よりそれぞれの立場から助言をいただきました。

家庭教育とPTA

～生と性を考える～

於：札幌パークホテル

第四分科会

現代核家族化が進み地域における人間関係の希薄化などにより家族や地域の教育力の低下が指摘されている。今改めてしつけや食生活など家庭内における基本的なルールの確立が求められる。本会は、保護者、先生さらには地域と互いに連携をはかりながら生きる力を養い子どもたちの健全な育ちを支えていくことができるよう協議を行った。

青森県立十和田西高等学校校父母と教師の会前会長の山崎明隆氏より、「本校の家庭教育」と題したアンケート結果から約90%の生徒が朝食をとっておりその生徒は欠席もなく何事にも目標を持ち意欲

的に取り組んでいる。また朝食を提供する保護者も意識が高く、家庭教育が充実している。それは家庭内の良好な関係が築かれているからだと言表がありました。

岐阜県立加茂農林高等学校PTA会長西田豊司氏より、「PTA活動に学ぶ、親子関係」と題して、東海学院大学と連携して子どもは食と健康について学び、保護者は学校や家庭において適切に対応できる心理学的スキルを身につけると言う目標を掲げ研修を開いている。その研修の感想の中でゲームに夢中な子どもへの声のかけ方が大変参考になった。子どもの視点におりることも大切なことだと発表がありました。

大阪府立農芸高等学校PTA会長中垣内臨慎氏より、「生と死」と題して、学校では牛や豚など多くの動物の飼育が行われ出産に生徒が立ち会うこともある。

命が生まれ育つことを学ぶことでご飯を残さず親に感謝するようになり、親も家庭での会話の中で再確認させてもらえ



ると発表がありました。

大分県立大分東高等学校PTA会長幸重久光氏より、「ビジョンサポート活動を通して」と題して、生徒一人ひとりが地域の一員であることを自覚してマナー・公共心を高め、世代間の交流を深めながら地域に愛される学校作りを行っている。子どもたちも「人のために何か進んですることは自分の心を豊かにしていく上で大切だと思う」と言った前向きな感想が発表された。

最後に北翔大学人間福祉学部福祉心理学科教授の中出佳操氏と北海道洞爺高等学校校長の佐々木淑子氏よりそれぞれの立場から助言を頂きました。

情報社会とPTA

～英雄のc o d o m oたち～

於：札幌市民ホール

特別第一分科会

「ネット社会の進展に伴い利便性が向上する半面、有害な影響も拡大し情報モラルの確立が喫緊の課題といえる。これを解決するため、家庭学校地域社会、関係機関が連携して何をすべきかができるのか考える」という主旨で札幌北陵高校演劇部の生徒とNTTドコモの田中眞澄氏の講演という形で取り組んできました。本校ではそれに伴い田中眞澄氏にお願いして「携帯安全教室」も開きました。

特別第一分科会は「情報社会とネットワーク」「ネット社会の進展に伴い利便性が向上する半面、有害な影響も拡大し情報モラルの確立が喫緊の課題といえる。これを解決するため、家庭学校地域社会、関係機関が連携して何をすべきかができるのか考える」という主旨で札幌北陵高校演劇部の生徒とNTTドコモの田中眞澄氏の講演という形で取り組んできました。本校ではそれに伴い田中眞澄氏にお願いして「携帯安全教室」も開きました。

演劇部の顧問の先生が、から台本を作成してくださいました。演劇の内容は「ケータイでメールのやり取りをしている母と娘。娘はPCでネットゲームをしながら母とメールをしている。なにかもめているらしい。様々な表情と動きで、喜怒哀楽を表現。お母さんの方が劣勢、母が携帯を閉じる。」親子の会話も「携帯電話」というシーンからはじまります。まさに携帯がなければ「生きていけない」という姿でしょうか。本番の熱い演技で参加者の皆様にもしつかりと問題提起ができたのではと思つていきます。(北海道札幌北陵高等学校のホームページに演劇部のブログがリンクされています。台本がアップされていますのでご覧いただけます。)



産業教育とPTA

～モノづくり・人づくり～

於：札幌市教育文化会館

特別第二分科会

「必ずしも演劇を見に来るわけではない950名の観客に、どの程度受け入れられるか心配でした。終了直後のブラボの声と、割れんばかりの拍手に生徒たちは感激していました。終わってみると生徒たちにとつても、私の人生においても、実に貴重な体験だったとしみじみ感じ、感謝しています。」というコメントをいただきました。

特別第二分科会、モノづくり・人づくりのテーマを掲げ、将来のスペシャリストを目指し、専門高校と地域が連携を図り、有為な人材を育成するために何が重要か、その方策を模索しました。

講演終了後の休憩時間には、全道の専門高校の展示と北海道札幌工業高校の生徒の指導による「ものづくり体験」を実施しました。鉄琴やメロディケース・調味料入れ、建設機械・測量体験などに参加者が真剣に取り組む、生徒に熱く質問している姿も見られ大盛況でした。休憩後、2校の事例発表がありました。



最初は、北海道遠別農業高等学校の磯部いづみPTA副会長が、「最北の農業高校の取り組み」と題して、日本で最北の農業高校として、過疎化と少子化による生徒減少に対し、生徒を確保するための学校活性化プロジェクトについて、地域の畜産の一つである「めん羊」の飼育頭数増加や小説の発売、ダチョウ孵化への挑戦、遠農高マルシェの開店など、特色を生かして生徒を確保しているとの報告でした。

次に北海道旭川工業高等学校の弓場朋子PTA会長が、「地域密着型のPTA活動を目指して」と題して、地域の皆様と共に子どもたちを育てて

いきたいと、年一回「PTAフェスタ」の日を設け、学校でフリーマーケットや手作り惣菜、野菜販売等を催し、その収益を卒業式の前夜の「卒業メモリアル花火」として打ち上げ、近隣の皆様と共に喜んでいいると報告。また、通学範囲が広いことから地域毎にPTAが集まり、交流を深める姿を動画を通して紹介しました。

発表後、事例発表について会場から質疑を受け、最後に北海道エコ・コミュニケーション・専門学校長佐藤俊氏より、元農業高校・工業高校の校長の経験からの助言をいただき分科会を閉会しました。

高校生と食

～いのち・食の未来を考える～

於：札幌プリンスホテル国際館パミール

特別第三分科会

高校生と食を考えると、朝食抜きや野菜不足などの食生活の乱れ、過食による肥満や健康障害、痩せ願望による拒食や栄養不足などがある。そんな中で「食育基本法」が制定され、学校・家庭・地域社会が一体となった食育の推進が求められている。①知育・体育・徳育と食育②食が心と体に及

様々な問題を指摘。高

命の源である「食」の

の日本では、

時代とも呼ば

れる現代の

研究・活動を

されている。

飽食の時代とも呼

ばれる現代

の日本では、

研究・活動を

されている。

基調講演は、キャスター・慶應義塾大学大学院教授の林美香子氏。大学で教鞭をとる傍ら、札幌を拠点にして、食・農業・環境・地域づくりなどの研究・活動がされている。飽食の時代とも呼ばれる現代の日本では、命の源である「食」の様々な問題を指摘。高校生と食を考えると、朝食抜きや野菜不足などの食生活の乱れ、過食による肥満や健康障害、痩せ願望による拒食や栄養不足などがある。そんな中で「食育基本法」が制定され、学校・家庭・地域社会が一体となった食育の推進が求められている。①知育・体育・徳育と食育②食が心と体に及ぼす影響③味覚教育、料理教室など食育の実践例④農業体験など食農教育の必要性などの観点から、「食」の大切さと「いのち」の尊さを分かりやすく話された。

続いて、道内高校2校の実践発表。静内農業高校のテーマは「食育・楽しく・明るく・Milk！おいしく学ぼう。地産地消！」。学校農場で生産する牛乳・野菜などの農畜産物を使い、小学生と一緒に「オリジナルピザ」を作る食育体験教室「しずないミルク学校」で、高校生が先生役となり、生産から加工・販売・消費までを小学生とともに学び合う実践を発表。帯広南商業高校のテーマは「とこち・NANSHOの魅力と威力でち産ち消を」。地域の素材（人・食材・組織など）を活用し、食の安全・安心意識に関する市民・校内アンケート調査を行い、「パン」で学校ブランド作りを企画。商品化されるまでの取組を発表。発表後、壇上でインタビュアーを受けた両校の生徒たちは、郷土の様子や学校PRを生き生きと語り、会場からは賞賛の拍手が送られた。



後半のパネルディスカッションは、やまもと農園代表山本宏氏、学校法人酪農学園大学理事長麻田信二氏、当別高等学校教諭今多靖子氏の3名をパネリストに、林美香子氏がコーディネーターを務め、「高校生を取り巻く環境」「食生活の改善に向けた取組」を柱にディスカッションを行った。山本氏は、体験学習の意義を唱え、農作業を通して子どもたちが大きく成長すること、教師の関わり方や農協など関係機関の活用、「美味しかった」「楽しかった」の言葉が農家への最高褒美などと、エピソードを交えて語られた。麻田氏は、道行政・農業経営・学校教育に携わった経験から、日本の食料自給率低下、農業従事者減少など数値を示して、食料危機を警鐘し、次世代を生きる高校生の食と健康について学校教育の役割をグローバルな視点で話された。今多氏は、学校現場で高校生の食生活や食の意識に関する実態調査と検証を行い、朝の欠食や野菜嫌い、栄養の偏り、孤食化などの問題傾向をあげ、専門学科・普通科を問わず学校での食育指導の具体的な取組の緊要性を語った。

最後に林氏は、食のこと、食事を作ることでコミュニケーションが生まれ、生きることの根源がここにある。「食育には評論家はいらぬ。ただ実践してください。」濃密に人と関わることに少ない今だからこそ、家族が笑顔で食卓を囲むことが大切とまとめた。

会場で振舞われたトマトジュース（道内高校で加工）は参加者に大好評でした。

日本の高校生を元気にします！

高校生新聞

高校生スポーツ



高校生新聞・高校生スポーツは、全国の高校生の活躍、勉強法・健康管理などのアドバイス、ニュース解説、進路情報など、高校生の生きる力と知恵はぐくむ情報が満載です。高等学校の教室で愛読されているほか、ご家庭でもご購入いただけます。取材のご希望も歓迎です。編集部までご連絡ください。

第14回「高校生新聞社賞」

学業・文化・スポーツ・生徒会・各種委員会、ボランティアなど、高校3年間を通じて努力を重ね、大きく飛躍した生徒に贈ります。2010年度は574校・1785人に授与。本年度受賞者は2・3月号で発表します。

SP 株式会社 スクールパートナーズ

高校生新聞社

<http://www.koukousei-sinbun.co.jp/>

本社：〒194-0022 東京都町田市森野1-34-10
TEL.042-725-1155(編集部) FAX.042-724-2710
西日本支社：〒532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原5-1-3
北海道支社：〒060-0807 北海道札幌市北区北七条西4-8-3

●1993年創刊 ●全国4,000校(2,785,309人)の生徒が愛読
●タブロイド判オールカラー平均24ページ ●毎月10日発行(8・3月休刊)

秋田県立男鹿海洋高等学校

「男鹿に学んで世界に羽ばたく」

【学校概要】

本校は平成16年に秋田県立海洋技術高等学校と秋田県立男鹿高等学校が統合し普通科2クラスと水産科2クラスからなる総合性高校として開校し、7年目を迎えました。校舎は、泣く子も黙る「なまはげ」の故郷、秋田県男鹿半島南磯海岸に面し、日本海を一望出来る高台にある普通科、海洋環境科、海洋科学科及び機械専攻科に四百名の生徒が学んでいます。

特色ある部活動としては、全国ダイビングコンテストで優勝するなど大活躍する「マリンスポーツ部」や全国高等学校総合文化祭郷土芸能発表会に出場した「なまはげ太鼓部」があります。

【PTA活動】
「楽しくなければPTAではない」を合い言葉にPTA活動を行っており、本校のPTAの取り組みを紹介します。

①サバ水煮缶詰製造体験
海洋科学科の生徒達が積極的に実習に取り組み、サバ水煮缶詰製造を保護者も体験する企画では、25名の参加募集が一日で定員に達するほどの盛況ぶり。原料に脂ののるノルウエー産のサバ二百kgを使用します。頭、尾や内臓を切り取り、缶のサイズに調整し、殺菌をして缶詰が出来上がります。休憩時間や昼食には持ち込みのご馳走や手作りの海鮮鍋などに歓声が上がります。

②スポーツ交流会
例年、保護者、教職員、バレーボール部員など80名ほど参加してフットバレー大会が行われます。7チームに分けて総当たりで行います。特徴は参加賞に保護者が製造したサバ缶詰2個です。また参加者全員にPTA会長賞や校長賞等の賞品が当たるように準備されています。試

合で盛り上がり、賞品で盛り上がり、そして懇親会で更に盛り上がります。③研修旅行
例年、秋の紅葉シーズンに行われます。大④PTA広報紙
赴任された校長の式辞や新入生代表の宣誓文も載り、入学式に第一号が発行されます。最終号（3月の修了式）まで手作りB4サイズ一枚が随時発行（月平均二〜三枚）され、今年の目標は28号です。主に学校行事や生徒達の資格取得、部活動の活躍の場面、保護者のコメントやPTA行事等の感想等内容が豊富です。特に昨年度からは、保護者の「私が高校生だった頃」の原稿をいただき連載しています。保護者からは学校の様子、生徒の活動がよく分かる、と好評です。毎年広報誌コンクールに出品し、秋田県代表としてPTA全国札幌大会と東北仙台大会の会場にも展示されました。

なまはげ太鼓の演奏



来高台にある普通科、海洋環境科、海洋科学科及び機械専攻科に四百名の生徒が学んでいます。

①海洋環境科
大型実習船船川丸を利用した約二ヶ月間のマングローブ実習や日本一周する国内航海実習、奄美大島でのダイビング実習、また小型実習船を利用したイカ釣り実習やワカメ養殖実習、刺し網実習等各種実習が行われます。

②海洋科学科
食品製造会社や流通関連会社で約1ヶ月間の「現場実習」を行い、進路選択に役立たせています。また実習で製造しているサバ水煮

③サバ水煮缶詰製造体験
海洋科学科の生徒達が積極的に実習に取り組み、サバ水煮缶詰製造を保護者も体験する企画では、25名の参加募集が一日で定員に達するほどの盛況ぶり。原料に脂ののるノルウエー産のサバ二百kgを使用します。頭、尾や内臓を切り取り、缶のサイズに調整し、殺菌をして缶詰が出来上がります。休憩時間や昼食には持ち込みのご馳走や手作りの海鮮鍋などに歓声が上がります。

④PTAバザー大盛況
PTAバザー大盛況の様子

物、地元の特産品の販売などで盛り上げ、親の奮闘を子どもたちに伝える場としている。この姿を見て子どもたちも頑張れると確信しています。

「男鹿に学んで世界に羽ばたく」vol.14

ひたすらに頑張る子どもたち。をもって導く先生たち、Aの仲間の姿をお伝えします。

①海洋環境科
大型実習船船川丸を利用した約二ヶ月間のマングローブ実習や日本一周する国内航海実習、奄美大島でのダイビング実習、また小型実習船を利用したイカ釣り実習やワカメ養殖実習、刺し網実習等各種実習が行われます。

②海洋科学科
食品製造会社や流通関連会社で約1ヶ月間の「現場実習」を行い、進路選択に役立たせています。また実習で製造しているサバ水煮

③サバ水煮缶詰製造体験
海洋科学科の生徒達が積極的に実習に取り組み、サバ水煮缶詰製造を保護者も体験する企画では、25名の参加募集が一日で定員に達するほどの盛況ぶり。原料に脂ののるノルウエー産のサバ二百kgを使用します。頭、尾や内臓を切り取り、缶のサイズに調整し、殺菌をして缶詰が出来上がります。休憩時間や昼食には持ち込みのご馳走や手作りの海鮮鍋などに歓声が上がります。

④PTAバザー大盛況
PTAバザー大盛況の様子

物、地元の特産品の販売などで盛り上げ、親の奮闘を子どもたちに伝える場としている。この姿を見て子どもたちも頑張れると確信しています。

「青春白書全国か 一輝く姿がこ

未来を見つめ、夢を追い求め、
その子どもたちを熱意
そしてPT

【鈴蘭の息吹】



本校の校章は、鈴蘭の三枚の葉をかたどったものです。昭和

22年秋に、当時の在校生によって作製されました。赤穂町（現駒ヶ根市）の『町花』が「スズラン」であったので、町の花を本校でも校章としました。皆さまご承知のように、鈴蘭は5月頃に白い花を咲かせる「其の香も崇高き」（校歌）可憐な、気品のある花です。鈴蘭の花言葉を知っていますか？「幸福の訪れ」「巧まざる優しさ」「純潔」。本校の生徒の行く末を示唆してくれている花です。

長野県立赤穂高等学校

『雄々しくたえぬ勤しみに』
確かな学力を身につけ、自立した人間をめざす

【学校の概要】



本校は正
6年（1
917
年）7月
15日の
村立赤

穂公民実業学校開校をも
って創立としています。
昭和23年3月31日、元々
は同一町内にあった町立
の旧赤穂農商学校と旧赤
穂高等女学校が、戦後の
新制度のもとで合併し、
長野県赤穂高等学校とし
て設立認可されました。
現在は、全日制課程と定
時制課程を併せ持ち、全
日制課程には商業科と普
通科が併設されています。
それぞれの学科の特
色を生かしながら、また
それぞれの異なる要素を
総合的に効率あるものに
して、より魅力ある学校
をめざしています。

【特色ある教育活動と それを支えるPTA】

①生徒会とPTAとの連
携 本校生徒会では、「自
主自立」を目標に、様々

な行事や催しに取り組ん
でいますが、生徒会に
とって最大の行事は7月
中旬に行われる文化祭
『鈴蘭祭』です。生徒会
委員会・文化系クラブ・
各学年・クラスなどの展
示や発表、合唱コンクー
ル、運動会、後夜祭（フア
イヤーストーム）など盛
りだくさんの内容で、準
備から片付けまで含めて
4日間を費やすという大
行事です。今年で50回目
を迎えました。この『鈴
蘭祭』に毎年PTAも深く
関わっています。春先
から生徒会とPTAと職
員の三者で懇談会を開い
て、生徒会側がPTAに
今年の文化祭の趣旨や内
容やPTAにお願いした
いことなどを説明しま
す。逆にPTA側から生
徒会への要望なども出し
て議論を深めます。そし
てPTAとして『鈴蘭祭』
に協力できる内容を決め
ます。今年もPTAとし
て、屋外のステージ設
営・PTA展・合唱コン
クールでのPTA合唱・



フアイヤーストームの
警備・地域
起こし・「こ
ま井」の販
売などにつ
いて協力を
しました。
「こま井」とは、50回と
いう節目の『鈴蘭祭』を
記念して、生徒会執行部
が駒ヶ根市の特産「こま
」を使った地域グルメ井を
考案し、名付けた井物の
名前です。サーモンとこ
まを食材とした、名付け
て『こまるサー』と豚肉
とこまを食材とした『こ
まるブー』の二種類を
考えました。PTA側は
駒ヶ根市内の飲食店と交
渉して、この二種類の「こ
ま井」を作ってもらい、『鈴
蘭祭』で完売しました。

③PTA作業 7月の文
化祭『鈴蘭祭』の前に生
徒と協力して行われる
一大行
事「PTA作
業」は
学校の
校舎内
外の環
境整備
を行う作業です。子ども
達に住みよい環境を作っ
てやりたい、という親の
願いからはじまりました。
また、綺麗にして『鈴
蘭祭』に来るお客様を迎
えようという思いもあり
ます。土曜日の午前中三
時間ほどを使い、体育館・
渡り廊下・教室の壁のペ
ンキ塗り、側溝の泥上げ、
草取り、庭木の剪定など
の作業を行います。一年
生の保護者の皆さまを中
心に、PTA役員・生徒・
職員が協力して行いま
す。毎年総勢百数十名を
越える方々が参加してい
ます。参加されたみなさ
んは、一緒に作業をしま
ながら、子どものこと、家
での様子、等々の会話を
楽しみながら、保護者
の親睦の場にもなってい
ます。

ロメートルの峠越えをす
る山坂道の、女子は約30
キロメートルの山坂道の
完走完歩をめざします。
この強歩大会にもPTA
は深く関わっています。
走ったり歩いている生徒
の交通整理や誘導の補
助、救護活動、ゴール後
の豚汁サービスなどを行
います。特に「強歩大会
で生徒に温かい汁物を」と
始まった豚汁サービス
は、お隣の市にある農業
高等学校の生徒が作った
味噌を使って作っていま
す。野菜は本校保護者の
皆さまに呼びかけてご家
庭の篤志を戴いていま
す。強歩大会が近づくと、
朝学校の玄関先にネギや
大根やゴボウなどが入っ
た段ボールやビニール袋
が置かれます。強歩大会
当日は、朝早くからPTA
役員をはじめ保護者の
皆さまが準備に取りかか
ります。走り終えた生徒
にはすこぶる好評で、何
杯もおかわりをする生徒
もいま
す。ま
た、PTA
も生徒
がゴール
する前
に試食

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

む「一日

です。今

年で49回

を迎えま

す。男子

は約41キ

分の限界

まで苦し

「ガンバッター」

静岡県教育委員会



仮園舎園庭の雑草取り。本園舎から学用品の搬出。「まごころ広場」カフェの運営補助、老人福祉施設で高齢者との交流。三日目は宮古水産高校、宮古工業高校生徒との交流。最終日、バス移動。参加生徒同士に絆が。



*草取り作業で疲れてしまった。その時、「がんばってー」と園児たちの声。その声に励まされまた雑草に立ち向かう。一人ではできないことも、みんなと力を合わせ支え合えばできる、と。きれいになった園庭で遊んでいる園児たちの姿に、私の心は嬉しさに満たされた。

参加生徒の想い

*希望しても参加できなかった大勢の仲間たちに、被災地で感じたこと、学んだことを伝えていくのが私の役割だ。被災した方たちが明るく元気なことに驚いた。「この震災のことを忘れないで」と。

「石垣そば」

本校の姉妹校、沖縄県石垣市八重山高校。6月、サーターアンダーギー三千個を被災地に支援。10月には、八重山高、盛岡四高、宮古北高、PTA、総勢76名が参加し、宮古市仮設住宅二箇所、牛汁と石垣そば七百個を炊

岩手県立盛岡第四高校

き出し。沖縄八重山民謡ライブや生徒同士の交流。最後は全員で沖縄和踊り。被災者の方々から感謝の笑顔を見た。



東北地区 仙台大会

「復興めざし 心ひとつに」をテーマに

東北地区仙台大会を終えて

第六十回東北地区高等学校PTA連合会仙台大会が、東日本大震災より7ヶ月が過ぎ、復興の兆しが見え始めてきた10月20日(木)、当初の予定(7月6・8日)より3カ月以上も遅れ開催されました。

この大会を開催するにあたっては、全国の会長をはじめ、東北地区の会長の皆さんからのご意見をいただき検討に検討を重ねたうえで開催となりました。

日程を変更して開催するので、いったいどのくらいの方々に参加していただけたのか、東北六県で七百名位か、いや、もっと多く千名位か、申し込み締め切りまでドキドキの毎日を通しました。



最終参加人数が約千七百名を超え、ほっと胸をなでおろしながらも、大会当日まで、無事何事もなく終了することが出来るかという不安でいっぱいでした。この不安は私だけではなく、事務局の先生方をはじめ、準備の段階から共に作業を進めてきたPTAの方々も同じ気持ちだったようでした。

仙台大会が無事終了した今、大会当日まで私を支えながら準備を共にしてきたスタッフの皆様に感謝すると共に、当日のみのスタッフとして働いていただいた方々にも感謝申し上げます。

大会午前に行われた、金美齢氏による記念講演は大変素晴らしいものでした。

そして午後からの研究協議はもちろんですが、ラストに、さとう宗幸氏によるトーク&ライブ。

そのトーク&ライブでは、氏が実際に被災地を訪問した話などがあり、最後に参加者全員で、『ふる



大会の最後には、参加者全員で、『ふるさと』を合唱した。

さと』を合唱し、今回のテーマとして揚げた『復興めざし、心ひとつに』のとおり、本当に会場全体が心ひとつになったのではないかと思います。

今回のテーマを胸にこれからの復興の担い手となる高校生の最大の応援団になっていきたいと思っています。

最後になりますが、大会当日、全高P連の相川会長をはじめ東京都公立高P連・静岡県公立高P連の役員の皆様、そして東北各地より参加してくださいました多くの会員の皆様に心より感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。(文責 日下実行委員長)

シリーズ 視点 東日本大震災 ボランティア活動

本校に寄せられた多くの支援。鹿児島県薩南工業高校から支援物資と共に全校生徒分のTシャツ、色紙が届いた。そのTシャツを着て、夏の高校野球地区大会を全校生徒で応援。ベスト4まで勝ち進む大健闘。京都府からは、教員やカウンスラーの派遣。宮津高校は教室仕切り板の提供等、各地の高校、企業、団体



からの文房具、辞書、義援金の援助。暖かい交流により、生徒一人ひとりの心に友情の輪が芽生え、絆となり、やがては日本の未来を築くため、歩み続けたい。

「がんばっぺ福島」

福島県立小高工業高校

平成23年3月11日、東日本大震災。被災地の復旧作業に多くのボランティア。その中に高校生の姿。各高校生徒会が動いた。義援金だけではなく、今、自分たちができることは何かと。学校やPTと共に、部活動の交流、被災者の受け入れ。被災県内での連携。行政の支援。寄せられたボランティア活動報告の中から4件紹介する。高校生にとって、ボランティア活動は自然な行動となった。それが自らの生き方のためであると感じているからだろうか。

(文責 佐々木克己)

「思いやり」

山形県立酒田北高校

石巻市で「思い出探し隊」に参加。津波で流された写真やアルバムの修



震災後、何かできることはないか、被災地へ行き、力になりたいという生徒会の意識は強く、市の救援活動情報を得て、まずは出来ることからと支援物資の仕分け作業を手伝った。そうした中で市の担当者が生徒の熱い思いを受け止め、一般市民の被災地ボランティアと同行する形での参加体制を整えてくれた。5月2回、7月1回の各土曜日、生徒21名、教職員7名の述べ参加者数。

宮城県名取市では、住宅地側溝泥出し作業。ヘドロ臭や粉塵と戦いながら、津波の痕跡に恐ろしさを感じた。気仙沼市、雨と悪臭の中、住宅に入り込んだ泥やごみを除去。復作業。回収された写真に付着したカビ、汚れをブラシで洗い、袋に入れる。暑さと高湿度の中、写真に写っている人たちは無事に避難できたのか、持ち主に届く日が来るのかと、祈るばかり。



参加した生徒は、被災の様子を自分の目で確かめ、その深刻さを感じた。復興のためには更なる支援が必要であると。自分たちの小さな活動が人のためになっていることを実感した時、一回り大きくなった。全校生に向けての報告会では、貴重な体験をした仲間の話が心に響き、自分も参加したいとの思いから、その後も希望者が絶えない。

酒田北高校は今年度で閉校し、来春統合して新しい学校となる。ボランティア精神は引き継がれていくことを確信する。

(社)全国高等学校PTA連合会 後援
AIU 高校生国際交流プログラム
(参加費無料)
国際交流を超える人間交流

「育てたいのは、子どもたちの未来。」
AIU CHARTIS

AIU 高校生国際交流プログラム事務局
Tel 03-5819-8288
Email hsd@highschooldiplomats.org
http://www.highschooldiplomats.org/

MS&AD 三井住友海上

さあ来い! リスク。

リスクとトータルに戦う
総合保険ブランド[GK]

三井住友海上火災保険株式会社
〒104-8252
東京都中央区新川 2-27-2
www.ms-ins.com

TOKIO MARINE NICHIDO

地球の未来にできること。
マングローブ「海の森」づくりは、
その答えのひとつです。

東京海上日動火災保険株式会社
東京都千代田区丸の内1-2-1
〒100-8050
http://www.tokiomarine-nichido.co.jp/

日本の保険は、
ジャパンが変える。

損保ジャパン

株式会社 損害保険ジャパン
〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1
TEL. 03(3349)3111
ホームページアドレス http://www.sompo-japan.co.jp

第一回会長・事務局長会議報告

9月24・25日の日程で常置委員会、会長・事務局長会議が京都市内で開催された。24日は総務委員会・理事会のほかに本年度から新たに組織等検討委員会が加わり、過密なスケジュールとなった。

組織等検討委員会は新法人移行を機に事業等の見直しを行い、財政的に健全化をめざす目的で本年度より発足した。

25日の会長・事務局長会議では、文部科学省社会教育課の西条地域・学校支援推進室長補佐から、国レベルでの施策の現況について貴重な講話があった。

ついで協議に入り、委員会報告に際して、全高P連の組織見直しについて活発な意見交換がなされた。

席上、東日本大震災に寄せられた義援金の第二次配分について、9月23日までに第二次配分を行ったことが相川会長から報告があった。

東日本大震災に係る義援金の第二次配分は次のとおり。岩手・宮城・福島・茨城・千葉・長野・新潟の各県の高P連会長宛で総額二千二百万円。また、義援金の受付を平成24年3月31日まで延長した。

(文責 本部事務局)

被災県にオーボエを贈呈

8月に開催された全国大会北海道大会歓迎レセプションで楽器工房(株)美ら音工房ヨーゼフ顧問の仲村博幸氏から、岩手・宮城・福島・茨城の高P連会長にオーボエが贈呈された。



中村氏は沖縄県高P連前役員で、相川会長に楽器贈呈の申し出があった。(文責 本部事務局)

健全育成委員会

委員長 岡蘭 正浩

第二回健全育成委員会の協議事項は、

(一)アンケート調査の進捗状況と今後の予定について。12月までに累計してPDFにまとめることを、京都大学院の木原先生から報告があった。

(二)薬物乱用防止パンフレット編集委員会の報告。パンフレットの配布は、平成24年、2月に全国発送の予定である。

(三)次年度健全育成委員会の計画案、方向性について。過去5回実態調査が行われ、結果報告の冊子となって配布されているが、どのように活用されているか活動報告がない、その為、今後はHPの活用等で展開をしていく。

(四)「バイクの3ない運動」について全国大会宣言文において平成元年をピークに、死亡事故は、右肩下がりに減少している。最近、自転車事故が多発している。次年度和歌山大会で、5年に一度の見直しの年にあたるので高校生の命を守るという観点から、双方を考慮し、主題にあった主文を検討する。

進路対策委員会報告

委員長 正木 毅

進路対策委員会では今年度、次のような活動をしておりです。

「新規高等学校卒業予定者に対する雇用確保について」、10月31日に厚生労働大臣及び文部科学大臣宛てに要請文を提出しました。また、各都道府県で雇用確保促進や就労支援等の活動に広く活用されている厚生労働省「緊急雇用創出事業」の期限が年度末に到来することから、引き続き独自の類似事業が各地域で継続できるよう今後の財源確保についての要請も併せて行ったところ。要請活動が次代を担う高校新卒者の夢と希望の実現に少しでも役立つよう祈念してやみません。

また、今年度は第五回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」を実施する年度となっております。全国9地区27校からいただく生徒と保護者のアンケート結果をリクルート社と共同で集計、分析し、有用なデータとして皆様方に提供するものです。より充実した内容となるよう、より広い範囲で活用できるよう新たな分析項目の追加等についても協議しているところです。

年度内に報告書を作成し、皆様方に早くお届けできるように委員一同奮闘しております。

調査広報委員会

委員長 青木真佐枝

9月に行われた第二回委員会では、70号の反省と71号の企画案、次年度の事業計画を検討いたしました。

その中で、全国大会での会報誌の配布は、PR効果が高いので次年度も継続したい。内容については地区大会まで入れる時間的に作業負担が大きいので、総会の報告などの速報版とし、9月以降に地区大会報告の特集号を発行する。

会報誌は年間4号の発行としたい。段組や表紙のカラーを季節による変化を持たせるなどの工夫を行う。次年度は、その年の委員会の独自性を出し、より充実した誌面にする為に2号目以降の企画・編集作業は、全国大会開催時に合わせ委員会を開催し、じっくりと企画を練る。等の活発な意見が交わされました。

今号の「視点」で、生徒のボランティア活動を取り上げました。

今後、ボランティア活動の紹介をシリーズ化してはどうかと言う案も出ております。従来、会報誌の「青春白書」やHPの「各都道府県市高P連便り」でも各校の活動を紹介しておりますが、より多くの情報発信の媒体として、各校の皆様には今後とも取材等へのご協力をお願いいたします。

研修委員会

委員長 早川 悟史

9月24日開催の第三回研修委員会において協議された事項は以下の通りです。

①23年度北海道大会を振り返って

北海道大会実行委員長所感、研修委員のレポートを発表し北海道大会を検証した。参加人数は9,753名+北海道スタッフ1,280名、計有料参加人数10,473名であった。

②24年度和歌山県大会の取り組みについて

進捗状況の報告をしていただいた。新しい取組みとして参加登録方法をJTBのシステムを使用し、各単Pが直接情報を入力する方法の提案があった。

③特別第三分科会テーマについて

一般社団法人化の関連があり、本日の理事会以降の次回研修委員会で協議することになった。

④23年度地区大会等の取組状況については

東日本大震災の影響で東北地区大会の開催が変更となった。

平成23年10月20日(木)仙台市で一日のみの開催予定。

⑤福井大会以降の開催地(東北地区)の確認

平成27年第六十五回全国大会開催地は岩手県に願いする方向で、理事会に提案する。